

アトウと名乗った人物

嘉永二（一八四九）年閏四月八日に来航したイギリス海軍の測量艦・マリナー号に通訳として乗り組んでいたアトウ（中国名・林阿多）と名乗った人物は、日本人漂流民の音吉であったことはすでに記した。

日本側の記録に音吉の風貌を伝えるものが残っている。そこには「年齢三十五、六歳ぐらい、中肉にて丈（身長）は並より少々低い」と記されている。音吉の年齢は、いくつかの説があるが、この時三十一歳であったと思われる。また江戸時代の後期の日本人の平均身長が百五十五、六センチであることから、それより低いということとは百五十センチぐらいであったことが想像できる。また「面は大きく角張り、平たい」とあるが、その後の記述に「鼻筋通り候」あるので、凹凸のないのつぺりした顔であったのか、判断しにくい。エラははっていたようである。「髪の毛、眉毛は黒く、ひげもない」とあり、「歯は上の一枚か二枚が欠けていて、下の歯は小さくて不揃い」と

観察が細かい。さらに「手足が小さく、内股歩きであり」「言語は国なまりがない」として、日本人の方言を話す者よりずっとわかりやすいと記されている。

こうした身体的特徴や話し方から「日本人」では、と思われても仕方ないのに、アトウは中国人であると言いつづける。事実、マリナー号のなかでも「オトサン」と呼ばれていたのに、それでも彼は「イギリスの服を着た中国人」としての立場を押し通した。

なぜに音吉は、日本人であることを隠し通そうとしたのであろうか。そもそも音吉は日本人であることが発覚することを、大変に恐れていた。

それは十二年前、アメリカ船のモリソン号で浦賀へ来航した時に砲撃をされたことがトラウマになっていった。音吉は「帰国し、上陸すれば拷問をうけなぶり殺しにされるのでは」と来航した夜は恐怖に打ち震えていたという。

こうした感情を押されることができなくなったのか、翌九日マリナー号を訪れた浦賀奉行所与力の田中信吾に、「十二年前に来航した異国船が停泊した場所は」と尋ねると、田中は野比沖を指した。次に「その異国船はどこ

の船であつたのか」と聞くと、わからないとの答えであつた。さらに「なぜ、その時は大砲を撃つたのか」と尋ねると、田中は「当時は幕府の異国船政策が無二念打ち払い令であつたので、砲撃をしたが、現在は薪水給与令に戻っており、渡来の意向を聞き、水・食料を供給してすみやかに退帆するように申し渡している」と答えた。ここまで聞いて音吉は、長年心の奥にもっていたものが少し薄らいだのであろうか、それ以上の質問はしなかった。

十日には、浦賀奉行所ではマリナー号を実測させてもらい、さらに詳細な絵図面かその写しが欲しい旨を頼んでいる。この行為は相手がイギリス海軍籍の艦艇であるだけに、通常ならば大変危険なことであるが、音吉が十一年前の話の後、自分がそのモリソン号に乗っていた日本人であることを打ち明けていることから、彼が日本人であるならばと無理なお願いをしたものと思われる。この実測も、吉田松陰の後年の手紙で中島三郎助親子がやっているように伝えられてきたが、実際には与力の田中信吾か香山又蔵と奉行所御用の船大工棟梁が行つたものであろう。音吉はその見返りに日本地図を一枚所望して

おり、また海鹿島周辺の測量もこうした取引材料であつた可能性が強い。(了)